

希少な生き物を見守り、共に生きていく

希少猛禽類を調査・保全する技術

「調査圧」ってご存知ですか？

猛禽類は警戒心が強いいため、実は調査員自体を警戒し避けて行動します。これを私たちは『調査圧』と呼んでいます。調査圧を与えると、彼らの行動圏を正確に把握できず、事業による影響などを正しく評価できません。

私たちは、鷹匠から猛禽類の正常行動と異常行動を識別する技を学び、必要に応じ車内観察を行うなど、調査圧を与えないように配慮しています。

定点観察



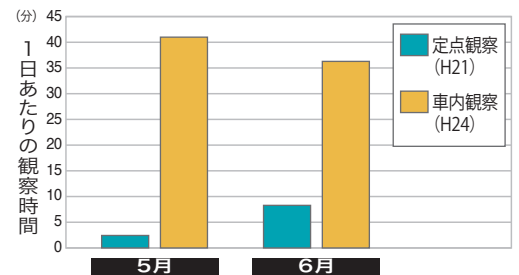
調査員が直接観察するので、できる限り目立たない服装で実施。

車内観察



調査員は車内から観察、さらにブラインドで人の気配を消すことで、調査圧を低減。

観察結果の比較



ある事業で、2つの手法でオジロワシを観察したところ、車内観察のほうが長時間観察でき、警戒心を抑えることが実証されました。

猛禽類と共に生きていくために行っていること

私たちは、猛禽類と共に生きていくために、開発などで失われたオオタカやハヤブサなどの営巣場所を創出するため、人工巣を製作・設置しています。また、利用状況をモニタリングし、必要な措置をとれるようにリアルタイムで映像を確認できるカメラの設置などにも取り組んでいます。



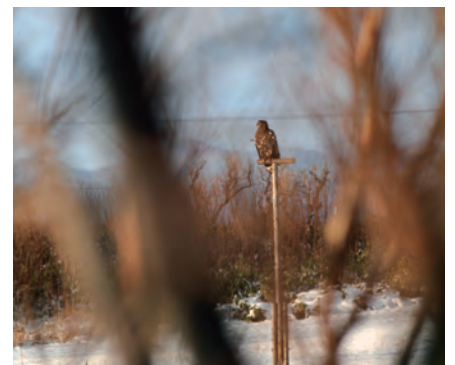
〈代替巣の設置〉

営巣環境や営巣木の条件を解析し、適地に人工巣を設置。これまでにオオタカ、ハヤブサの人工巣を製作・設置しました。



〈とまり防止ワイヤー設置〉

橋梁におけるロードキル対策として、とまり防止のためのワイヤーを設置。本数、間隔、張り具合で効果が異なります。



〈代替とまり木の設置〉

事業によってとまり木が失われたため、餌場の近くにとまり木を設置。目的に応じて高さ、太さ、向きなどを変えます。

新しい技術『馴化』^{じゅんか}に取り組んでいます

猛禽類の多くは適切に対応すれば、繁殖中であっても工事を続けることができます。私たちは、そのために『馴化』と呼ばれる手法を用いて、工事と繁殖の両立を実現しています。

巣から遠い場所から工事を始めたり、少しずつ作業時間や作業量を増やしてみたり、彼らが怒ったり威嚇したら、作業を止めてスッと引く。こうした手順を繰り返すことで、彼らのほうが優位な立場にいると思わせ、徐々に工事に馴れさせるのです。

馴化への理解を深めていただくため、私たちは勉強会を開いたり、予行演習なども行っています。



人と自然との架け橋を目指して

私たちは、北海道から本州の平地～山岳地に至るまで、あらゆるフィールドで調査を行っています。その内容は、大気環境、水環境、自然環境、景観など、さまざまな調査・分析・評価を行っています。そうした経験を通して、いつも感じることは、その地域の方々が身近な自然の希少さ、大切さに気が付いていないことです。このため、身近な生き物の存在や大切さを伝え、人と自然との架け橋となることも、私たちの重要な役割だと考えています。

自然観察施設の展示支援



周辺の自然環境の特徴や生き物などを紹介・解説するため、自然観察施設内の展示やレイアウトを検討。展示用の昆虫や植物の標本、解説用のパネルや動画などのほか、写真集やパンフレットを作成。

木育活動…「希望」を「きぼう」でプロジェクト



道内各地の木育教室などで、小さな「木棒=きぼう」に東北へのメッセージを書いてもらうプロジェクトに、“木育マイスター”として弊社職員が参加。昨年度は、岩手県久慈市立久喜保育園、宮城県県民の森中央記念館へきぼうを集めたプールを贈呈。